

シューベルトの歌曲

J.マイアホーファーの詩による 5 つの歌

マイアホーファーは、オーストリアの詩人・台本作家。シューベルトの友人の中でももっともよく知られた人物の一人。「冥府への旅」(Fahrt zum Hades)の「ハデス(Hades)」とは、黄泉(よみ)の世界。彼岸へ向かう舟旅が、現世の苦悩からの解放を願う切実な祈りとして、厳粛かつ劇的に描かれる。「夕べの星」は、本当の愛を求めながらも、仲間から離れてしまった孤独な「夕星」の寂寥を静かに歌う。「ドナウの川の上で」は、川を渡る小舟に揺られながら、抗うことができない時の流れ、人間の営みの儚さを嘆く。「双子座に寄せる船乗りの歌」は、航海の守護神である双子座を見上げながら、船乗りが海の安全を願う真摯な歌。「双子座の歌」とは対照的に「舟人」は、嵐の中を果敢に進む姿を歌う。ピアノの激しい動きが、自然の猛威に立ち向かう海の男を際立たせる。

H.ハイネの詩による 6 つの歌(《白鳥の歌》より)

《白鳥の歌》は、作曲家の死後、出版商のハスリンガーによって編集・発表された。《美しき水車屋の娘》《冬の旅》とともに、シューベルトの「三大歌曲集」に数えられる。3人の詩人の詩に付曲した14の歌からなるが、その内訳は、レルシュタープの詩が7曲、ハイネの詩が6曲、そしてザイドルの詩が1曲となっている。以下では、ハインリヒ・ハイネが作詞した6曲について簡単に紹介する。

「第10曲 漁師の娘」は「こっちへおいで」と漁師の娘を誘惑する。《白鳥の歌》の中では例外的に軽妙な曲。「第12曲 海辺で」は「哀れな女が涙に毒を盛った」と、やつれた男が嘆く。「第11曲 都会」は別れの場面。ヴェニスを想わせる街を小舟に乗って進む。「第13曲 影法師」は、かつての恋人の家の前でドッペルゲンガーを見た「私」に戦慄が走る。「第9曲 彼女の絵姿」は「もう君に会えないなんて!」と、未練にひたる男の嘆き。「第8曲 アトラス」は、世の不条理をギリシア神話の巨人神アトラスになぞらえて歌う。全世界の不幸を背負った身は、怒りと悲しみに震える。

様々な詩人による歌

「鳩の便り」は《白鳥の歌》の掉尾を飾ると同時に、シューベルトの「絶筆」と言われる曲。軽快なシンコペーションに乗せた、愛らしくも切ない旋律が、辞世の句のように優しく響く。「窓辺で」は、静かな夜に孤独を噛みしめながら、壁に照る月光や星の瞬きに慰めを見出す。「君こそわが憩い」は、愛する人への信頼と献身を誓った歌で、シューベルトの歌曲のなかでも特に評価が高い。静謐なピアノで始まり、しっとりとした調べが「君こそ安らぎ」と歌い上げる。「それらがここにいたことは」では、残り香や涙の跡にかつて愛した人の面影を見る。浮遊感のある和声が、儚い気配や遠い記憶を表現している。「ミューズの息子」は、文豪ゲーテの詩を用いた、躍動感あふれる一曲。野原や森に遊ぶ詩人の歓喜が軽やかに駆け抜けていく。「春に」では、明るい春の陽光のなか、失った愛の悲しみを吐露する。しかし、曲調は決して暗くなく、訥々と思い出を語る。「ブルックの丘にて」では、愛する人のもとを去り、憂鬱を振り払うように馬で駆ける青年が描かれる。ギャロップを模したピアノ伴奏が圧巻! 「星」は、夜空に瞬く星々が、愛の導き手として語りかけてくるようなチャーミングな曲。「さすらい人」を歌ったシューベルトの曲はいくつかあるが、これはフリードリヒ・シュレーゲルの詩による一篇。旅人の孤独が、月との語らいの中で紡ぎ出されていく。「夕映えの中で」は、夕焼けに染まる空を仰ぎながら、神の息吹を体感する。温かく包み込むような曲調が深い安らぎへと誘う。